耕耘部の時計

宮沢賢治

青空文庫

一、午前八時五分

農場の耕耘部の農夫室は、雪からの反射で白びかりがいっぱいでした。
まん中の大きな釜からは湯気が盛んにたち、農夫たちはもう食事もすんで、脚絆を巻いたり藁沓をはいたり、はたらきに出る支度をしてゐました。
俄かに戸があいて、赤い毛布でこさへたシャツを着た若い血色のいゝ男がはひって来ました。
みんなは一ぺんにそっちを見ました。
その男は、黄いろなゴムの長靴をはいて、脚をきちんとそろへて、まっすぐに立って云ひました。
「農夫長の宮野目さんはどなたですか。」
「おれだ。」
かゞんで炉に靴下を乾かしてゐたせいの低い犬の毛皮を着た農夫が、腰をのばして立ちあがりました。
「何か用かい。」
「私は、今事務所から、こちらで働らけと云はれてやって参りました。」
農夫長はうなづきました。

「さうか。丁度いゝ所だった。昨夜はどこへ泊った。」
「事務所へ泊りました。」
「さうか。丁度よかった。この人について行って呉れ。玉蜀黍の脱穀をしてるんだ。機械は八時半から動くからな。今からすぐ行くんだ。」農夫長は隣りで脚絆を巻いてゐる顔のまっ赤な農夫を指しました。
「承知しました。」
みんなはそれっきり黙って仕度しました。赤シャツはみんなの仕度する間、入口にまっすぐに立って、室の中を見まはしてゐましたが、ふと室の正面にかけてある円い柱時計を見あげました。
その盤面は青じろくて、ツルツル光って、いかにも舶来の上等らしく、どこでも見たことのないやうなものでした。
赤シャツは右腕をあげて自分の腕時計を見て何気なく低くつぶやきました。
「あいつは十五分進んでゐるな。」それから腕時計の竜頭を引っぱって針を直さうとしました。そしたらさっきから仕度ができてめづらしさうにこの新らしい農夫の近くに立ってそのやうすを見てゐた子供の百姓が俄かにくすりと笑ひました。
するとどう云ふわけかみんなもどっと笑ったのです。一斉にその青じろい美しい時計の盤面を見あげながら。

赤シャツはすっかりどきまぎしてしまひました。そしてきまりの悪いのを軽く足ぶみなどをしてごまかしながらみんなの仕度のできるのを待ってゐました。

二、午前十二時

る、る、る、る、る、る、る、る、る、る。

脱穀器は小屋やそこら中の雪、それからすきとほったつめたい空気をふるはせてまはりつゞけました。

小屋の天井にのぼった人たちは、器械の上の方からどんどん乾いた玉蜀黍をはふり込みました。

それはたちまち器械の中で、きれいな黄色の穀粒と白い細長い芯とにわかれて、器械の両側に落ちて来るのでした。今朝来たばかりの赤シャツの農夫は、シャベルで落ちて来る穀粒をしやくって向ふに投げ出してゐました。それはもう黄いろの小山を作ってゐたのです。二人の農夫は次から次とせはしく落ちて来る芯を集めて、小屋のうしろの汽罐室に運びました。

ほこりはいっぱいに立ち、午ちかくの日光は四つの窓から四本の青い棒になって小屋の中に落ちました。赤シャツの農夫はすっかり塵にまみれ、しきりに汗をふきました。

俄かにピタッとたうもろこしの粒の落ちて来るのがとまりました。それからもう四粒ばかり

ぽろぽろっところがって来たと思ふとあとは器械ばかりまるで今までとちがった楽なやうな音をたてながらまはりつゞけました。

「無くなったな。」赤シャツの農夫はつぶやいて、も一度シャツの袖でひたひをぬぐひ、胸をはだけて脱穀小屋の戸口に立ちました。

「これで午だ。」天井でも叫んでゐます。

る、る、る、る、る、る、る、る、る、る。

器械はやっぱり凍ったはたけや牧草地の雪をふるはせてまはってゐます。

脱穀小屋の庇の下に、貯蔵庫から玉蜀黍のそりを牽いて来た二疋の馬が、首を垂れてだまって立って居ました。

赤シャツの農夫は馬に近よって頸を平手で叩かうとしました。

その時、向ふの農夫室のうしろの雪の高みの上に立てられた高い柱の上の小さな鐘が、前後にゆれ出し音はカランカランカランカランとうつくしく雪を渡って来ました。今までじっと立ってゐた馬は、この時一緒に頸をあげ、いかにもきれいに歩調を踏んで、厩の方へ歩き出し、空のそりはひとりでに馬について雪を滑って行きました。赤シャツの農夫はすこしわらってそれを見送ってゐましたが、ふと思ひ出したやうに右手をあげて自分の腕時計を見ました。そして不思議さうに、

「今度は合ってゐるな。」とつぶやきました。

三、午后零時五十分

午の食事が済んでから、みんなは農夫室の火を囲んでしばらくやすんで居ました。炭火はチラチラ青い焔を出し、窓ガラスからはうるんだ白い雲が、額もかっと痛いやうなまっ青なそらをあてなく流れて行くのが見えました。

「お前、郷里はどこだ。」農夫長は石炭函にこしかけて両手を火にあぶりながら今朝来た赤シャツにたづねました。

「福島です。」

「前はどこに居たね。」

「六原に居りました。」

「どうして向ふをやめたんだい。」

「一ぺん郷国へ帰りましてね、あすこも陰気でいやだから今度はこっちへ来たんです。」

「さうかい。六原に居たんぢゃ馬は使へるだらうな。」

「使へます。」

「いつまでこっちに居る積りだい。」

「ずっと居ますよ。」

「さうか。」農夫長はだまってしまひました。

一人の農夫が兵隊の古外套(ふるぐわいたう)をぬぎながら入って来ました。

「場長は帰ってゐるかい。」

「まだ帰らないよ。」

「さうか。」

時計ががちっと鳴りました。あの蒼白(あをじろ)いつるつるの瀬戸でできてゐるらしい立派な盤面(ダイアル)の時計です。

「さあぢき一時だ、みんな仕事に行って呉れ。」農夫長が云ひました。

赤シャツの農夫はまたこっそりと自分の腕時計を見ました。

たしかに腕時計は一時五分前なのにその大きな時計は一時二十分前でした。農夫長はぢき一時だと云ひ、時計もたしかにがちっと鳴り、それに針は二十分前、今朝は進んでさっきは合ひ、今度は十五分おくれてゐる、赤シャツはぼんやりダイアルを見てゐました。

俄(には)かに誰(たれ)かがクスクス笑ひました。みんなは続いてどっと笑ひました。すっかり今朝の通りです。赤シャツの農夫はきまり悪さうに、急いで戸をあけて脱穀小屋の方へ行きました。あとではまだみんなの気のよささうな笑ひ声にまじって、

「あいつは仲々気取ってるな。」

「時計ばかり苦にしてるよ。」といふやうな声が聞えました。

四、

日暮れからすっかり雪になりました。
外ではちらちらちら雪が降ってゐます。
農夫室には電燈が明るく点き、火はまっ赤に熾りました。
赤シャツの農夫は炉のそばの土間に燕麦の稈を一束敷いて、その上に足を投げ出して座り、小さな手帳に何か書き込んでゐました。
みんなは本部へ行ったり、停車場まで酒を呑みに行ったりして、室にはたゞ四人だけでした。
（一月十日、玉蜀黍脱穀）と赤シャツは手帳に書きました。
「今夜積るぞ。」
「一尺は積るな。」
「帝釈の湯で、熊又捕れたってな。」
「さうか。今年は二疋目だな。」
その時です。あの蒼白い美しい柱時計がガンガンガンガン六時を打ちました。
藁の上の若い農夫はぎょっとしました。そして急いで自分の腕時計を調べて、それからまるで食ひ込むやうに向ふの怪しい時計を見つめました。腕時計も六時、柱時計の音も六時なのに

その針は五時四十五分です。今度はおくれたのです。さっき仕事を終って帰ったときは十分進んでゐました。さあ、今だ。赤シャツの農夫はだまって針をにらみつけました。二人の炉ばたの百姓たちは、それを見て又面白さうに笑ったのです。

さあ、その時です。いままで五時五十分を指してゐた長い針が俄かに電のやうに飛んで、一ぺんに六時十五分の所まで来てぴたっととまりました。

「何だ、この時計、針のねぢが緩んでるんだ。」

赤シャツの農夫は大声で叫んで立ちあがりました。みんなもも一度わらひました。

赤シャツの農夫は、窓ぶちにのぼって、時計の蓋をひらき、針をがたがた動かして見てから、盤に書いてある小さな字を読みました。

「この時計、上等だな。巴里製だ。針がゆるんだんだ。」

農夫は針の上のねぢをまはしました。

「修繕したのか。汝、時計屋に居たな。」炉のそばの年老った農夫が云ひました。若い農夫は、も一度自分の腕時計に柱時計の針を合せて、安心したやうに蓋をしめ、ぴょんと土間にはね降りました。

外では雪がこんこんこんこん降り、酒を《の》呑みに出掛けた人たちも、停車場まで行くのはやめたらうと思はれたのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第十巻」筑摩書房
　1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行
　1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
2003年4月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

耕耘部の時計

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/